

# 教育・研究一筋に五〇年 北大初代総長 佐藤昌介

—(その1)—



佐藤昌介

Sato Shosuke

「リテラポブリ」とは、ラテン語で「ポブラの手紙」という意味です。北海道大学及び、その前身である札幌農学校にゆかりのある人々の言葉を、「リテラポブリ」としてお届けします。

一九三〇年二月、四〇年にわたって、札幌農学校長・東北帝国大学農科大学長・北海道帝国大学総長を務めた佐藤昌介（一八五六―一九三九）が総長を辞任した。翌年一月の新旧総長歡送迎会で佐藤は学生に向けてこう述べた。

▼「私は十六歳の時郷里をあとにして上京しましたが、当時の学生は誰もかれも大臣参議を夢み、国家の柱石になる事ばかりを望んでゐたのですが、さういふ環境の中から私は大臣学の一切を振り捨て、北海道の大自然を愛して渡道したのであります。すべての人が大臣になつても致し方がないと思つたからであります。しかし当時の私たちの中からは、後に国家の大権を操縦する総理大臣や、種々要路の大官なども出ました。

渡道五年にして米国へ留学を命ぜられ、或は労働をしたり印刷職工をしたり新聞記者をしたり、種々辛酸をなめて勉強をしたのでありますが、その後帰朝、札幌農



北海道帝国大学新聞

学校に教鞭を取り、爾来四十余年本道開拓の仕事に微力を振るつて来たのであります。その間いろいろの誘惑があつたにも拘らず、教育界から離れる事なしに今日に及びました。もし誘惑に応じたつれば、たとへば県知事や小さな都市の市長位にはなつてゐた事と思ひます。

よく成金といふ言葉を聞きますが、学界には、いはゆる成金、成金学者といふのはありません。学問の修得は一步一步、歩

に歩を積んでなされるもので、試験の時一夜勉強などは排斥すべきであります。どうか諸君も、にはか人才になる事をやめ眼界視野を世界的の水準にまで広げて、わが大学を世界の大学とすべく精励していただきたいのであります。

『北海道帝国大学新聞』

一九三二年一月二二日

この五〇余年前、東京英語学校（東京大学の前身）に学んでいた十九歳の佐藤昌介は、札幌農学校教頭W・S・クラークのスカウトに応じ、第一期生として農学校に入学した。四年後の一八八〇年七月、農学校の第一回卒業式では「北海道殖民論」を講演した。アメリカ留学後、母校の教授となり「殖民学」の講義を開講すると共に、北海道「開拓」に対して多くの提言・指導を行ない、北海道農会の会長も長く務めた。北大の屋台骨を支え続け、北海道というフィールドに根差した教育・研究一筋五〇年に及んだ半生への自負は決して大袈裟なものではない。

一八七九年七月、農学校最終学年の四年級への進級を前に、佐藤は、農学を担当していたアメリカ教師W・P・ブルックスの北海道渡島地方未開地調査に随行した。翌年一月、佐藤はこの調査のレポートを「渡島地方巡回報文」として開拓使に提出した。最初の著述である。冒頭の「渡島地方開拓総論」で、①山国で農耕に不適であること、②農耕に適した原野が海沿いに多いが、周辺住民は農業より漁業を生業とすることを望んでいること、③地形上、農産物の運搬に不便であること、の三点を渡島地方「開拓」に不利な条件として掲げた上で、以下のように論ずる。

▼「このように自然条件が不利であることから、開拓植民の仕事が活発な進歩を示すことはないようである。しかしながら、今少し活きた眼を開き、開拓の真理を研究すれば、これらの不利はあえてひどく苦慮するほどのことではないと知るであらう。このところを論じたいと思う。いわゆる開拓というものは、人智によつて自然の不便

リテラポプリ .....2

教育・研究一筋に五〇年  
北大初代総長 佐藤昌介 ―(その1)  
大学文書館 井上 高聡

特集：北大は車と環境の調和に挑む .....4

工学研究科 近久 武美  
小川 英之  
萩原 亨

自動車とチタンと宇宙環境  
工学研究科 中村 孝

熱効率がよい排熱回収HCCIエンジン  
工学研究科 首藤 登志夫

施設探訪 .....15

札幌農学校第二農場モデルバーン  
メディア・コミュニケーション研究院 眞崎 睦子

虫と石② .....16

ノコギリクワガタ  
総合博物館 大原 昌宏  
アメジストとその仲間  
総合博物館 松枝 大治

もういちど北大と出会うー〈その十二〉 .....18

良く遊び、良く学べ  
工学研究科 江丸 貴紀

information .....19

建築設計図が語る北大の歴史ー〈第12回〉 .....20

北大交流プラザ「エルムの森」  
工学研究科 池上 重康



札幌農学校第1期生卒業記念 (1880年、附属図書館北方資料室所蔵)  
前列左から3人目が佐藤昌介

を制圧し、あわせて天地が万物を生み育てることに助力し、それによって国土を開き人口を増やすことにある。そもそも世

界開闢より以来、いまだ黄金が野に満ち、五穀が巷にあふれ、摘み取ることもなく得ることができ、耕すこともなく収穫がある楽園があるとは聞いたことがない。実際、富国文明で天下に鳴る東隣の北米連邦のような国も、四百年前の昔にさかのぼると無人の地域で、野獣の巣窟であり、あるいは気候は厳しく寒く、あるいは地質が痩せており、あるいは運輸が困難であり、今日の隆盛を導くものは少しもない。しかしながら皮膚の白い人種がここに移民開拓植民の仕事に取りかかって以来、一つの利益が起こり、一つの仕事の実を結び、農工の進歩は止まることなく速く進み、その間に戦乱が相継ぎ、青い田畑が血の海に変わる惨状もあったが、あらゆる障害や困難に屈



「渡島地方巡回報文」(1880年、附属図書館北方資料室所蔵)

することなく、ついに自然の不便に勝ち、天地が万物を生み育てることを助け、今日に至ると風土は変わり、人びとは平和を得て、山路は開けて汽車が通じ、痩せた土地は肥えた土地となるに至ったのである。

る。必ずまた盛んになることだろう。これをもつてこの地を見れば、渡島地方のようなところは、今たとえ三三の不利な点があるにしても、開拓の真理を研究し、お手本を連邦に取り、それによって農工の仕事を盛んにすれば、数年を待つことなく、豊かな大地とすることは、また困難ではないのである。」(編集委員会による現代語訳)

(札幌農学校簿書〇八九、  
附属図書館北方資料室所蔵)

札幌農学校はアメリカ式農業を北海道へ導入することを目的に設置された。その理念を体現するかのようには、アメリカを手本として渡島地方を「開拓」することを力説している。若き俊英佐藤昌介二十三歳、気概に満ちた学問的出発点である。

大学文書館 井上 高聡  
Iwano Takashi